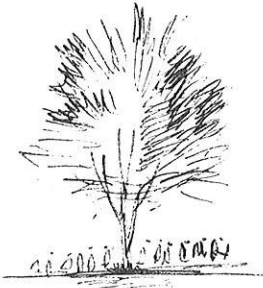


# 光の子



No.74 1997. 11. 1.

● 希望に満たされて (ローマの信徒への手紙第15章13節)



「金色の小さき鳥のかたちして」

え・中島英子

「山の影」

間引葉を負ふ夕影のながながと

下り梁山風すさびそめにけり

蛇穴に入りて濃くせる山の影

露けさの鶏のよく鳴く日なりけり

筋引いて山の雨くる紫蘇畑

冬近し美樹の周りに子が群れて

火を囲む背すがたに冬まぎれなし

黛 執 (「春野」主宰)

# 自分を無にして

フィリピの信徒への手紙 2・7節

かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。

理事長 福島 勲

共に有名なタレント夫妻が離婚した。週刊誌とっておきの材料で、このようなゴシップを好む層を狙い撃ちした。離婚の理由は、お互い仕事に忙しくいつもスレ違いの生活だったということである。

このような家庭は主人が二人いるということなのか。昔の人はよく人生を洞察したものだ。家に女がいて安しという字ができていた。

平成九年の大相撲初場所で大関若乃花が優勝した。アナウンサーがマイクを向けると、何の飾り気もなく家族のお陰ですといった。

どこかのあどけなく幼稚っぽい表現のように思えた。家族の何が土俵の上の勝負の力となるのか、と問いたくなる。がふと思いついて、局外者にはわからない妻子の暖かい心遣いや配慮が快心の勝利と繋がっているのだらうと思わしめられる。

哲学者田辺元の思索活動を支え、学究生活に力を注ぎ、田辺哲学をうち立てた背後には、夫人の死があったといわれる。

田辺元の歌に「わがために命ささげて死に行ける妻はよみがえりわがうちに生く」というのがある。(武内義範・田辺哲学と絶対無)

どのような生活で、どのように田辺哲学の中に夫人が生きているのか

知らないけれど、他の中に生きる己を無にする生き様であろう。

前号で旧訳聖書コヘレトの空しさをみたが、つまらないとか無意味、徒勞とかいった空しさは、まさにナンセンスだ。しかし空しさのもう一つの面、イエス・キリストが天から降り、十字架に死なれたということである。

聖書はこれを「自分を無にして」と表現している。神の身分でありながら、僕の身分となり人間の姿であらわれた。

この「無」は愛という字に置き替えてよい。神の絶対の愛である。世の男性は妻を自分のものとして付属品扱いし、己にかしずかせてよしとし、自らは何一つ手を貸そうとしない。昔の武士が外には釣り竿とビクだけは持つことが許されていたが、その他の荷物は持つことがなかった。昔だけではない今でも地方や人によっては、この古風な男性氣質が罷り通っている。

この節の若い男性はそのようなことがないかもしれないが、われわれ年寄りには、わかっているが、実行しようとする過去の因習にとらわれ、外聞を憚り、ついつい思わぬ振る舞いをしてしまう。

亭主関白を勧めるつもりは毛頭な

いが、お互いに己を無にして他のために生きる真の愛を問いたい。

一家の夫であり、主婦である。これこの世の外向けの顔である。では内向けの顔があるとしたらどうなるのか。それは夫であり妻であり、妻であり夫であろうか。お互い己を無にして他のために生きることである。とは申せ、このように書いても直ちに賛意を表し得ないという人がいるだらう。

他人ごとではない。実行できない自らを告白せざるを得ない。

この狭い夫婦の範囲での愛の真実さへわれわれには実行できかねる。それがキリストにあつては、全人類に対してである。まさに驚異的であり、奇跡なのである。

愛し愛されるということは互恵的関係である。片思いという現象では愛する者の弱味、あるいは損ということ、酬いられることがない。

神がわれわれを愛される。不遜な表現であるが、神の片思いである。絶対の愛は報いを求めない。

われわれにはできない愛であるが、それでも、神は命令される。

神がどのように私たちを愛されたのですから、私たちもお互いに愛し合うべきです。(ヨハネの第一の手紙四・十一)

## エッセイ ヒロサワさん

私は今、家の中で「ヒロサワさん」と呼ばれる事がある。レッキとした(?)名前があるのに「ヒロサワさん」なのである。しかもこの名前は、私と家内と娘だけに通じる名前であつて、他の誰も知らない筈である。では、どうして私が「ヒロサワさん」なのか。その名前の由来は、こうである。

十月五日は母の命日である。毎年窓ぎわのキンモクセイの花の香る素晴らしい秋の一日になるのだが、今年もそんな日だった。近くに住む私の兄弟たちが、三三五五集まってきた、仏前に花を手向け墓参をするのがならわしとなっている。そんな中に、昼食を食べていく人がいる。

兄弟だから昼食といつても、例年うどんに天ぶらぐらいで、大した御馳走はない。

実は、その天ぶらを揚げるのが、この私の仕事なのである。とは言つても、天ぶらのすべての仕事を私がやるのではなく、準備一切は家内がやって、最終的に油で揚げる段階で私が登場し、ジュージューと揚げるのである。したがって我が家では、

他の事は別としても、事天ぶらに關しては私が専門家なのである。「今日のはうまいね。カラッと揚がつているよ。」などと言われようものなら、まるで本物の専門家にでもなったように「いやいや、まだまだなんだよ。」などと、いい気なものである。

ところが、今年の十月五日は、お昼少し前に娘がやってきて、家内の仕事を手伝ってくれた。しかも、事もあろうに私の専門分野である天ぶら揚げまで、全部やってしまったのである。今日こそは腕の良いところを見せてやろうと意気込んでいた私

は、自分の出番がなくなつてしまい、一瞬拍子抜けして、ボケーンとしていた外はなかった。

私は、娘に一応のお礼を言った。「どうもありがとう。今日の天ぶら、とてもうまいよ。」そして冗談まじりに付け加えた。「まるで今年のジャイアンツみたいだね。清原選手が入ってきたために、ヒロサワの出番がなくなつちやつたよ。ヒロサワもまだいくらでもホームランを打てるんだが。」

娘は恐縮して「ごめんなさいヒロ

サワさん、出番を取っちゃつて。」と言った。

この一言が、私を「ヒロサワさん」にしてしまったという訳だ。

それからというもの、家の中で料理をする時、私に手伝つて貰いたい時には、家内も、時々やって来る娘も、決まつて「ヒロサワさん」と呼ぶのである。得意の天ぶら揚げはもち論、みそ汁の最後の味噌入れなどの段階になると「ヒロサワさん。」と来る。そこで私が出て行くのである。そして「うーん、うまい。これはヒットだね。ヒロサワもまだまだ打てるね。」と、なるのである。しまいは「ヒロサワさん、タイマーが鳴ったら火を止めてね、タマゴを水で冷やしてね。」などと、実にやり甲斐のない、つまらない仕事までヒロサワにやらせるのである。ヒロサワは、本当はもつと大物なのである。アリーグレードで高級な天ぶら揚げならいざ知らず、半熟卵の火を止めるなどという他愛のない仕事は、本来ヒロサワの仕事ではない。

ところで、娘が天ぶら揚げを全部やつてくれたのは、私たち夫婦が少々

彫刻家 中島 陸雄

年老いてきたということに対する、いたわりの心の表れなのだらう。したがつて、一生懸命に働いてくれたことその事は、大変ありがたい。ありがたい事ではあるが、その反面、自分のやる事がなくなつた寂しさも、同時に感じていたのも正直なところであつた。

十月五日は母の命日である。その母の晩年、私達家族は、決して悪意ではなく、母の体を思いやりながら母の仕事を取り上げてしまつてはいなかつたか。これは危ないから、これは骨が折れるから、これは重いから、とすべての母の仕事を、好意と思ひやりをもつて。それが、決して母にとつてしあわせな事ではなかつたのも知らずに。

こう考えてくると私も「ヒロサワさん。」「ヒロサワさん。」と呼ばれているうちが、花なのかも知れない。



## 2つの文化に生きる

8

日本キリスト教団東大宮教会  
バーガー 京子

その後、ぼつりぼつりと少年の思いが新聞に載っていた。

「学校の休み時間にトイレに隠れながら誰も気づかないままホームルームが終わってしまった。僕は存在が薄い。」僕は学校から見捨てられていた。「あの事件の背景には、この少年が周りの人から受け入れてもらえなかった、と言う極度の孤独感があったようである。」

最近、インドの大統領に就任した被差別カースト出身のナラヤナン氏が副大統領だった一昨年暮れ、広島で開かれた国際会議に出席した際、「平和を実現するには、他者の感情を感じ取り、共感し、思いやる必要がある。」と語った。他者の感情を感じ取り、思いやることは一人一人の存在を認めて受け入れる事でもある。一人一人がいろいろな意見を持って生きていることを感じあうことである。

しかし、日本ではなぜか違う仕方方をしている人が仲間外れになっこのこちが悪くなるという傾向がある。

以前テレビで日本とフランスの両校生の比較をしていた。ざらりと並んだルーズソックスと、はやりの髪飾りをつけて歩いている日本の学生を見て、「日本の学生には個性とい

うものはないの？」とフランスの学生は不思議がっていた。

昨年、亡くなられた遠藤周作さんがフランス留学をしていた頃、フランスはあまりに個人を主張し、尊重するため、かなり落ち込んで帰国したという話を聞いた。日本はなぜか個人というより全体の和がどうか大切になり、自然と同じ様な行動、同じ様な服装をしていると気持ちが悪く落ち着くという雰囲気がある。けれども全体の和を尊重しすぎるために個人の存在を軽視しすぎるのも日本文化の弱点ではないかと、この頃思うことがある。

日本は一見、平和だが一人一人をとつてみると、抱え切れないほどの問題をもつていて、実はそれをどうやって解決したらよいか分からないでいる人間の集団のようにも思えてくる。

最近、テレビでこんなニュースを見た。アメリカのニューメキシコ州では、あまりに社会の犯罪が多いため、四年前から小・中学校で「人格形成プログラム」という基本的価値観を教える教科を設けた。これは宗教科のない六つの普遍的価値観を柱としている。①尊敬②思いやり③良い市民④信頼⑤公正⑥責任感である。競争に勝つより人を思いやる、

自然科学に携わっているくせに具体的なことに弱い。歴史に関する無知はその最たるもので、世界史も日本史もさっぱり解らない。自分の生きてきた時代ぐらいは知っておかないと思えば、昭和史と名がついた本はよく買うようになった。読んでいるときは面白いと思うが、さっぱり残らない。もっともこれは最近とみにひどくなった脳細胞の脱落に起因するところが大ではあるが。

山形大学医学部教授  
仙道 富士郎

## ③〇 つぶやきの学者もどき C先生とベルガモン博物館

そんな男にとつてもベルリンのベルガモン博物館は圧巻であった。正確な年代は未だによく解らないのだが、紀元前何千年、今から数千年も前にあんなに巨大な祭壇や市場や城壁が存在していたことを目の当たりにすると、人間は何と昔から大変な動物であったことかとすっかり考えさせられてしまった。しかも単に巨大であるばかりではなく、その他の彫刻も含めて実に美しいのだ。そしてまた逆にこんな古代

オリエントから何千年の間、人間はいったい何をしてきたのだろうと思う。

ベルガモン博物館での次なる感慨は、ドイツ人はこれらの巨大な建造物を古代オリエントの遺跡からどうやって運んできたのだろうかということに連なるものである。どんな理由をつけて、そこに住んでいる人達から略奪してきたのだろうか。この点に関してはイギリスの方がもっと詳しく、ピラミッドをエジプトから略奪するくらい朝飯前ときている。第二次大戦中に我が国がアジア諸国で練り広げた数々の略奪を正当化しようなどという意図からこんなことを言っているわけではない。古代オリエントであんなにも美しい物達を造り出し得た人間は何千年たってもまだこれくらい品位の低いことしかしていないのかという想いがつのるのである。

それにしても、C先生の優しさに本当に感じ入るばかりである。今回のシンポジウムに招待されたのも、もとはと言えば、C先生の知り合いの研究者の計らいによるものなのだが、ベルリンにはすでに何回も訪れているC先生夫妻が、私達夫婦のためにベルリン見物に一日をさいてくれて、まず「ここははずさないほう

がいい」と、この博物館に連れて来てくれたのである。食道癌を患い、それを克服したあと、今度は膀胱癌になり、その手術を終えたばかりのC先生はさすがに痩せてしまい、今にでも倒れてしまいそうな足どりはある。

しかし、ぼうつと像に見入っている小生の所に時々近づいてきて、本当に適格なコメントをくれる。

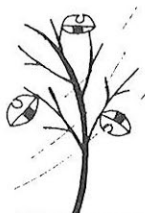
古代オリエントの地図の前で、C先生は湾岸戦争の時のイラク爆撃でアメリカは大事な古代遺跡をめちゃめちゃにしてしまったと嘆かれる。それでなくともC先生のアメリカ嫌いは有名で、彼は世界的に有名な学者でヨーロッパには知人も多く、数え切れない程訪問しているのだが、米国を訪れたことは少ない。先生に言わせると、「英語をペラペラ話す日本の学者にろくなのがない」ということになる。少し極論のようにも聞こえるが、米国で発表された研究を物まねして得意満面としている一部の日本の学者に対する批判としては、かなりの的を得ている。

大学院に入学したときにC先生に出会ったのだから、もう三〇年以上もつきあわせていただいていることになるのだが、ベルリンを案内してくれた日に初めてC先生の怒る顔を

人を誉めたり、困っていたら助けるなど、算数や国語のように一つの教科として具体的に授業で教えている。子どもたちは同じ価値観を共有することで「将来自分が何になっても人間としてのこの基本が大切。」と声を揃えて言っている。生徒たちはいい子でいることはかっこいいことだと思ひ始め、学校の規則違反も減り、学習効果も上がってきているとのことだ。

このプログラムの内容を見ると何も目新しいものもなく、私たち大人から見ると当たり前のことばかりである。ただ、この当たり前のことが今の子どもたちに伝わっていないのではないかと、一人の大人として最近よく思う。

今日日本中の中学生の中で七万人余りが三十日以上登校拒否を経験している。これは六十人に一人という高い割合だ。中学高校が大学受験の準備に追われている日本の教育だが、いい加減に、生きていくのに一番大切な一人一人の「人間を育てる」教育が具体化されてもよいのではないかと、と歯がゆい気持ちでいる今日この頃である。



見た。シンポジウムの開催者によって企画された夕食を食べながらのポーター遊びの集合場所へ行くためにタクシーに乗った時である。方向音痴の小生にも解るぐらいの感じで、運転手は、街の中心部をぐるぐる廻りはじめた。はじめは黙っていたC先生が最後にものすごい勢いで怒りはじめ、タクシー運転手はようやく車を止めた。これまで一度も見せたことがないC先生の一面であった。不正なことに対しては決して許すことのない厳しい生き方をしてきた人であることは周囲から知られていたが、そんな生き方を垣間見せられた気がした。「ドイツ人の運転手はみんな親切だと思っていたのに……」すっかりしよげてしまった小生達夫婦を見るC先生の顔はまたいつもの笑顔に戻っていた。

### お詫びと訂正

本誌七三号の本欄、「学者もどきのつぶやき」シリーズのナンバールとタイトルに間違いがありました。お詫びして次のように訂正します。

学者もどきのつぶやき ②⑨  
フォーチュンクッキー



# プルームズ

暮らしの彩り 笹山家

先日、夕食後から朝食後まで家を空けた。そのため、ゴミ出し、風呂掃除、朝食づくりなど私のいない時間帯の仕事を、高校一年生の啓と、中学一年の珠美に任せることになった。嬉しいことに二人は頼まれた仕事をあっさり、とても快く引き受け、それをすっかり丁寧になさしてくれた。

お風呂はいつも黒ずんでいる部分までとても綺麗になっている。何とスチールウルまで持ち出して、黒ずみと戦ったのだ。お陰でお風呂の時間の心地よさを倍増させた。

重くて臭くて袋に穴でもあくと液体の滴る生ゴミの袋でさえ姿を消している。

鯖の文化干し、大根サラダ、みそ汁、ご飯、前夜のおでんが朝食に用意され、登園、登校、働きに出る者たちのお腹を十分に満たした。手際、出来ばえ全て大人(私?)よりよくて、その上きちんと後片づけもされ

ていた。

子どもたちの家事ぶりは思ってたよりも上だった。意欲的に取り組んだ姿勢は自信と自尊に光っていた。

「今度の恵理さんの連休も大丈夫だから」とは大活躍だった珠美の頼れる言葉。じゃあ甘えてみようかなという気にさせられる。

「でも三日が限度だなあ。」の一言は、この家での私自身の存在さえも肯定してくれたのだった!

笹山 恵理



原田家日記

二歳児千佳がやってきた。あつと言う間に四ヶ月経ち、季節を二曲がりした。子どもの頃の、その中でもゴールデンタイム。もつと、もつとゆっくり時が流れてほしい。そんな思いの中で、ハラハラ、ドキドキの日々である。

河のほとり

倉沢家

中三の勇は高校に行きたいといながら学習に集中できない日々を過ごしていた。

そうしていたある日曜日、朝の十時には終わっていた教会から夜になるまで帰ってこない。それも本家の受験生の将司君と明日から中間試験が始まる高一の潔君も一緒にゲームセンターで遊んできたのだという。とうとう施設長の所まで話を通ってしまった。

施設長室に呼ばれた三人は大いに叱られて、「それでどう始末をつけるのか」と、施設長にただされて、きょんとしていた。

「あんな者にはなりたくない」と君たちも思っているやぐざだつて、おとしませをつける時には小指を落としてお詫びするんだそうだ。あんなやぐざよりも自分は上だと思ってる君たちは、今日の君たちの行動の責任を自分に対し隣人に対してどうとるつもりなのか。」と、迫られた。そんなやりとりが長く感じる三十分ほどがすぎると、三人ともぐしよぐしよに頬をぬらしていた。

「一番大きな潔がみんなの責任をとるのがいいと思うがどうだ。」とい



神田 幸枝

一人一人に明確な道が与えられますようにと祈る日々

当初、一日の緊張は入浴時間。湯

舟に抱っこして入れようものなら、引つかれてしまう。水恐怖症かと思うほど泣く。その時期は三週間でびたつと脱出。お風呂、プールはもちろん、水が大好きになる。水着痕がくつきり残る小麦色の肌になった。

「ばんぱい」(乾杯)が得意になったのは一ヶ月目。コップとコップだけではない。同じものを見つけると何でも「ばんぱい」である。お花とお花、アリオアリ、鉛と鉛、煎餅と煎餅のみならず、自分のひじとひじ・入浴中はおなかとおなか。何と首や目まで乾杯させられてしまった。

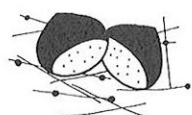
二ヶ月目・千佳の言語にもずいぶん慣れた。が、続々新語が登場。「アイノー(私の)」「フワツ」(これは何?)今から英語を習えばバイリンガルだろう。

三ヶ月目。べたべた、ヒタヒタ。足音が近づき、「おはよー、おはよー。」と起きてくる。保母に続き、いつも二番目の早起き。何とか足音が近づく前に家事を進めようと、焦って手際が良くなった。保母の作詞作曲、

われて、潔君が「はい、そうさせて下さい。」と言ったとたん、勇が「先生、僕がみんなのために何でもします。だから僕だけに何か責任をとらせて下さい。」

と涙声で言い出した。すると将司も蚊の泣くような声で「僕も何でもする。」と言って泣き出してしまった。「よし、もういい、あんな馬鹿なことをまたやつたら、今度の分も含めて責任をとって貰うから。」と、施設長も声を詰まらせて言った。プレッシャーに弱い子どもたちは試験の前などによく不安定になる。今回もそうだっただろうが、人はマインナスを共にする中で友情を得、それを克服しながら成長していくのだろう、と思いつている。

倉沢 智子



子どもたちの季節

仙道家

秋も深まってきました。

朝、目を覚まし、子どもたちを起こします。「おはよう」という小鳥のような私の声に、子どもたちは、さわやかに目覚めます。なんてことは、ありません。

四小節しかない千佳のテーマソングがあちこちで口ずさまれるようになった。ご機嫌がいい時は、本人が合わせてスローテンポで歌っている。

両親の来訪、保母のお出かけの時の留守番、イタズラを叱られたと、人との関係の中で、嬉しかったり、寂しかったり、不安だったり、千佳の心が揺れた四ヶ月目。三つ子の魂が育つ一日一日を重ねている。

竹花 信恵



光の中で

佐藤家

埼玉は秋晴れが続いている。それと裏腹に次々と起こる子どもたちの問題に振り回され、自分自身を見失い、寄った本屋でこんな本が目にとまった。

生きるヒント四という本の中で、作者の五木寛之さんが、「若い頃、キリスト教の神父さんにいじわるな

「早くしないとご飯になるよ」「何でまだ寝てんの!いい加減にしなさい」と声も大きくなります。

私の発声練習中に、中三の溪子は半年ほど前から始めた朝食作りをします。最近手際も味付けもうんと上手になり、レパートリーも増えました。

溪子が寝坊したことがあり、ご飯以外は何もできていない朝食時間になってしまいました。私がつてしまえば事もなかったのですが、溪子のためにはなりません。

慌ててやってきた溪子は鍋に水を入れみそ汁を作り始めました。「溪子ちゃん、他のものを作っている時間はないね。小学生はもう学校へ行く時間になるし。」

その日の朝食は、タイマーで助かったご飯と、みそ汁、それにふりかけでした。誰も文句を言いませんでしたが、溪子には応えようです。

それ以来、寝坊で朝食が貧しくなったことはありません。扇風機を壊し、厳しい暑さの夏を耐えた環と一志も一回り大きくなり収穫の時を過ごしています。

池田 祐子



現場から

### 光の子たちと ③

藤本 曜子

「カンカンカンカン」風にのってやってくる踏切の音をつかまえて、裕君は「ガタンガタン、ガタンガタン、でんちゃ、でんちゃ」と利根川の土手の方を指さして言います。

「はっぱ」「ブーブー」「わんわん」に続いて、「ガタンガタン」を覚えた裕君は、電車が大好きです。なかなか寝つけなかった夜に、遠くでひかる東武線の明かりを外に出て見ていたこともあります。

高く青く澄んだ桃の空が広がる日、裕君を自転車の前に乗せて、土手に電車を見に行きました。土手までいくと線路のすぐ側まで行くことが出来るのです。

お昼前の時間帯だったので、電車が来るのもまばらです。来る時には、遠くの方から順番に踏切が鳴ります。「カンカンカンカンカンカンカン」。だんだん大きくなる踏切の音に合わせて、裕君も準備をします。線路のすぐ脇の鉄条網から少し離れて、私の隣にちよこんとお座りします。いくら大好きな電車で真横を通られると、少し怖いようです。「あっち」「こっち」と指さしながら、

電車の来る方向を探して、目を輝かせています。いよいよ電車が来ました。

電車を指差し、「ガタンガタン、ガタンガタン、ばいばい。」と言いながら手を振ります。運転士さんも気がついてくれて、にこにこ控えめに手を振ってくれます。でも小さな裕君にはせっかくなか運転士さんが手を振ってくれても見えないのが残念……。

でも昼間のゆつくりとした時間には御座敷列車なども通ります。そこのおばあさんが手を振ってくれているのが見えました。今度は裕君も気がついて、御機嫌になりました。

最近裕君は家の中でも「カンカンカンカンカン」と踏切の真似をしておせんぼをします。トイレのドアでカンカンカン、ダイニングに入ろうとするとカンカンカン、部屋からであろうとしてもカンカンカン。いつも遊んでくれている貴樹君や洋君の真似なのでしょう。

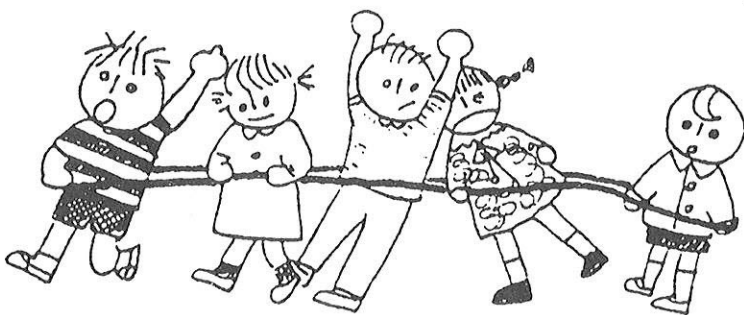
洋君と貴樹君は裕君の遊びのお師匠さんです。庭で二人の後をくっついて何でも真似します。貴樹君が芝

生をステージに大きな声で歌を歌えば、裕も歌う、洋君が芝生でとんぼがえりをすれば、裕も重たいおしりと足を手で支えようとします。小学生に混ざって二人が自転車をひっぱって走っていれば、裕も一番小さな三輪車のような壊れた自転車を押して、その中に加わっているのです。

その裕君のあこがれのお兄ちゃん達のいるお隣のお家に、一人でどことどこ遊びに行くことがあります。そこには、裕君の持つていない魅力的なおもちゃが沢山あるようです。みんな優しくおもちゃを貸してくれるのですが、でもやっぱり子ども同士のこと、喧嘩が絶えません。誰かの泣き声が聞こえてくることはしょっちゅうです。

今日は裕君の泣き声が聞こえませんでした。自分の靴を手に持って、裸足のまま、私のいる方へ泣きながらやってきます。自分の思うようにおもちゃが貸してもらえなくて我慢できなかったのかしら、と思っていると、どうやらそうではありません。洋君にカンカンカンとおせんぼされたのが悲しくて泣いてしまったようです。

自分もやるのね、と思いがちでも、ヨシヨシと頭をなで、まだまだ修行が足りないな〜とつぶやいてみたりもします。



### 養護メモ 69

#### うわさ

菅原 哲男

また庄一のことである。とうとう彼は七月に高校へ退学願をした。

これまで中卒者の一〇〇%が高校進学を果たしてきた。そのことで、高校で学ぶ教科学習による常識的な知識や技術を身につけること、同じ年齢の者たちとの交わりを願ってはいた。しかし、それよりも切実なこととして、この社会で生きていくに必要な、生活していく具体的技術や知識を身につけるための訓練の期間を延長することがある。

義務教育とは、この社会で生きていくために最低限必要な知識や技術を身につけさせるものであったはずだったのだが、今や、よりよい高校に行つて安定した会社に入り安穏な暮らしをするための予備知識を詰め込むところとなっているようだ。中学卒業者がこの社会で生きていくための具体的な役に立つ技術も知識も本当に少ないのだ。第一そんなことを予想して小中学校の先生方は「教育」などしてはいないだろう。

そんな理由から、光の子どもの家では高校進学を重点的な取り組みの柱に据えてきた。ほとんどの子ども

たちが前向きな意欲などを持ったことがないままここにやってくる。

その子どもたちに自尊の心をはぐくみ更に向上の意欲を生成することを願って、光の子どもの家はあらゆる試みを展開してきた。

一人一人に対応する課題を作り、夕食後の約二時間の学習指導を欠かさないできたこともその一つである。それらの結果が光の子どもの家では中卒で働くという選択肢を具体的に子どもたちは経験しなかった。

さて、これまででなかった高校中退者となった庄一は、熱心な応援者である栗原肇氏が創業運営している造園業の見習いとして約一年になる。彼は、この七月「外に出て自立したい」と訴えてきた。

働く者としてのプライドもあるだろうし、措置延長期間が十二月で終わることもあり試みることにした。手頃なアルバイトをお借りし、関わってきた指導員が生活を見ることにして彼の一人暮らしを始めた。

それ以来、彼の家は、彼と同じ様な地域の子どもたちが訪れ、何やかやと集まるようになっていった。

一週間ほどで、毎晩のように三〜四名、時には十名程の子どもが夜に集まり、たむろするようになった。

私をはじめ指導員たちは懸命に彼らと語り、何とか庄一の暮らしを落ち着かせようと試みたが、彼らのエネルギーと頭数には圧倒されつ放しであった。しまいに、家出少年や、かっぱらいなどをして逃れてくる者もある始末となった。そんな子どもたちに、庄一は実に優しく関わり、盗みの少年にきちんと反省を促し、一緒に謝罪に向いたりもした。そんなことをしながらも、彼はくる者を決して拒まなかった。

私たちが栗原氏までが、家に帰るように説得し、追い払うのだが、私たちがいなくなるとまた集まってくる、イタチゴッコが約四十日続いた。そんなある夜更け三時頃、庄一と小学校からの友人が約十キロの道を歩いてやってきて、「先生、俺のいる所がなくなりました。あいつら何をするか分からない、怖くなった。何とか追い出して下さい。お願いします。」と私に懇願した。

何回追い出しても集まってくるその子どもたちに、一番困り果てていたのは庄一自身だったのである。一筋縄ではいかないその子どもたちを何とか追い出し、家出少年三名

を補導してくれたのは、いろいろなことで知り合いになった加須署のお巡りさんたちであった。

それから約一ヶ月後、光の子どもの家後援会の役員会の席上、「この卒業生がアルバイトに住んで、かっぱらいや恐喝など酷いことをしてかしたそうじゃないか。そのことを説明してほしい。そんな子どもがいる施設を後援なんかできないと脱退した者も出ています」と発言があった。

気が転倒するほど驚き、事の次第を説明した。「後援会に期待していたのは、何か悪い事があると施設の子どもだろう、と決めつける差別的風潮を何とか改善して頂きたい」とであった、事も重ねてお願いした。そのアルバイトの近所の方々には大変ご迷惑をおかけした。アルバイトの修復・弁償も一通りではないだろう。伏してお詫びするつもりである。

しかし、このことで明らかになったこの地域の子どもたちの問題の所在や、それへの対応など課題は山のようにある。そんな問題のすべてを、都合よく「施設の子」や誰かのせいなど、特別なこととして何もしない、これまでのやり方こそ改めていただかなければならないのである。

落ち度は多かったが、現実には庄一は第一の犠牲者でもあったのである。





1997年11月3日

ようこそ！  
第13回感謝の集いへ！

日誌抄 = 暮らしの風景 =

1997年 6月1日 ▶ 7月31日

- |  |   |
|--|---|
| <p>1日 藻刈り。払暁から総出で田圃の水路の草刈 この地方の農事暦の名残が今も</p> <p>2日 甘楽霞入所 原田家竹花保母担当 姉の美樹はグループホームに 事情があって別々に暮らすことに 姉妹関係を配慮しての養育を始める</p> <p>3日 東大宮教会の黒田やす子、バーガー京子、加須市の小谷野亨、梓沢あづさ、渋谷滯、中田病院、田部竹子、斉藤良子、島崎なぎさ、横村スミ子、網取八重子などの各氏より 第4回定員外職員確保のためのバザー用の献品。 感謝</p> <p>4日 加須市の「しずくの会」が今年も草取りのご奉仕。三十名ほどの人たちがきれいになりました 感謝</p> <p>7日 定員外職員確保のための第4回バザー実施 お天気に恵まれ 沢山の人々で盛会 収益493,651円をご寄付いただく お出でいただいた沢山の地域の方々との暖かい交流も大きな収穫にして</p> <p>8日 中学二年の光太郎剣道初段審査に合格<br/>○ 日本キリスト教団岩槻教会より花の日のお花を沢山</p> | <p>1日 大利根町母親クラブが見学と研修にご来訪</p> <p>4日 町内遠藤ひとし、奈良喜代治各氏よりお米を 感謝</p> <p>7日 鎮守の天王様のお祭 小学生5名が参加</p> <p>9日 町内篠崎忠宏氏ご紹介の朝霞など県南蕎麦商組合有志がご来訪 手打ち蕎麦の実演と夕食会を子どもたち後援会役員などがにぎやかに楽しく 心から感謝</p> <p>11日 木部すなお保母職員宿舎の階段を踏み外し骨折入院</p> <p>15日 町福祉課長他来訪して これまで続けてきた町内の子どもの養育に関する取り組みの一つが町行政の福祉施策として本格的に制度化される トワイライトスティ・ショートスティの契約を大利根町と締結 開設以来昔年の感を禁じ得ず</p> <p>16日 群馬県子持山学園へ菅原が職員研修の講演に</p> <p>19日 HONDA四輪販売南関東労働組合より大きな冷蔵庫三台いただく 開設以来のものがダウン寸前で！<br/>○ 夏休みオープニング夕食会を園庭で HONDA労働のみなさんも加わっていただき バーベキューなどでおいしく楽しく そして夏休みの計画の披露と決意表明も</p> <p>20日 待ちに待った夏休み始まる 海に山にそして学習に沢山の方々のご助力によって</p> <p>29日 十回になる女子聖学院の恒例のワークキャンプが今年も 草取りに汗を流し 聖書をひもとく一泊二日</p> |
|--|---|

反 射 光

☆この一夏賑やかだった燕の巣に遅い秋の日が注ぎます☆この町の子どもの問題のすさまじさと地域の人々の「施設の子」に対する感覚を庄一の一人立ちの失敗の中で実感させられました☆「施設の子」は悪いものという感覚が開設反対運動の悪夢と重なります☆この国の施設で暮らさなければならぬ事情は様々です☆ひとり一人の異なる事情は個人生活に関することで明らかではありませんが☆施設の子だからきつと悪いに違いないという予見はこの地域だけではなく人々の心や感情にしっかりと食い込んでいます☆そのあたりをお伝えしたくて養護メモに記しました☆それにしても五〇年ぶりに改正された児童福祉法ですが、何も変わりはないという失望が現場に津波のように広がっています☆それでも子ども問題は激しい変質をやめません☆これからこの地域の子どもの問題から逃げないで関わる決意を新たにしています☆変わらぬご支援を！  
(哲)